

ピアノのお話 X

前回まで——

有名な女流作家ジョージ・サンド George Sand（ジョルジュ・サンドという読みは誤り）はパリで同棲していたショパンを何度か彼女の田舎のノアンにある館に連れて行ったことがある。そこでは彼女は女主人として土地の名士たちや遠来の客を招いて夜会を開くことも多かった。問題のその夜はサンドとショパンがホスト役を務めていたが、サンドの発案でピアニスト X 氏が幕の蔭でピアノを披露し、客たちにその X 氏がだれであるかを当ててもらおうというゲームが提唱された。さて幕の蔭で演奏が始まるとそれはリストの曲だった。その演奏には超絶的な名人技が見られ、だれが聴いても弾き手リスト本人ではないかと思われた——。

演奏が終わり、盛大な拍手が贈られ、bis（アンコール）という声がかかる中、女主人のサンドが幕の前に現れ、にっこりとして言った。

「ただいまのピアノ演奏、もう皆様にはピアニストがだれであるか、おわかりになりましたでしょうか。」

夜会の客たちは口々に「リストだ」「リストでしょう」と答えた。ほかの名はなかった。

サンドは再びにっこりとして言った。「ありがとうございます。それではご紹介しましょう。いま演奏されたのはこの方です。」

そういうとサンドはカーテンをするすると引いてみせた。中にいたピアニストが椅子から立ち上がって聴衆に一礼した。

聴衆はアッと驚いてどよめいた。それは実に意外なことで、客たちを仰天させるのに十分だった。

中から現れたピアニストはショパンその人だったのである。

「ショパン！」

「そうです。今夜の余興を引き受けてくださったのはショパンさんでした。」

サンドが告げると、客たちはさらにどよめいた。「ショパンだ」、「ショパンが…。」

どよめきがしばらくして収まりかけると、サンドが皆に語りかけた。

「…実は、私、先日あるところで貴婦人方がお話しになっているのを聞いておりましたら、こういう言葉が聞かれました。

『いま、一番上手なピアニストってだれかしら…』

これに対して皆さんが口々に意見を述べられました。

『それはなんと言ってもヘルツよ』

『いえ。ヒュンテンだと思うわ』

『ちがうわよ、名人といえばカルクブレンナーだと思うわ』

『いえ、タールベルクよ』

皆さんがやがやわいわいとど囂員のピアニストたちの名を挙げましたが、揉めているうちに、やはりリストが最高だという意見に傾きかけました。すると、ある方がこう言われました。『そうよ、やっぱりリストよ。リストのように弾ける人はいないわ。あの技巧といい、すばらしいスタイルといい、うっとりとするような詩情といい、リストに勝てる人はいないし、リストの真似なんて絶対だれもできないわよ！』そこで皆さんは納得なさったように静かになってしまわれました。そこで私は皆様におたずねしました。「ショパンはどうですか？」

それに対する皆様のお答えは「ショパンは立派な音楽家であるけれど、リストとは全くスタイルがちがうから、リストのように弾くことはできないでしょう」というものでした。でも、私は別の意見を持っていましたので、今日この場をお借りして、ちょっとした余興をショパンさんをお願いしたのでした。いかがでしたでしょうか、ショパンさんの弾いたリストは…」



「リスト本人が弾いているのかと思ったよ」とだれかが言うと、居合せた客たちは皆一斉に「そうだ」とばかりに手を叩いたので会場も揺れんばかりでした。「リストだと思ったよ…。」

偽物のリストは今夜の話題をすっかりさらってしまった。だれも、まさかショパンがリストに化けるとは思わなかったのである。ショパンは詩的で内省的で、到底リストのあの華麗で派手な演奏には及びもつかないと思っていたのである。確かに“常識”というものはそのようなものだ。しかし、ショパン本人はリストに化けおおせる自信があったにちがいない——だからこそ、サンドが提案したときにこの幕の蔭のショウを引き受けたのである。

執筆／石井宏（音楽評論家）

1930年、東京生まれ。音楽評論家・作家・翻訳家。モーツァルト評論の第一人者と目され、評論活動のほか、ラジオやテレビの番組でも評判となる。2004年、『反音楽史 さらば、ベートーヴェン』（新潮社）で山本七平賞を受賞。

優れた音楽芸術を発信して四半世紀。世界の山田和樹と共に奏でるベートーヴェン“歓喜の歌”

—サラムンカホール開館25周年記念— 第九特別公演

チケット
発売中

2019. 6/15(土) 15:00 開演 [14:30 開場]

指揮：山田 和樹
ソプラノ：國光 ともこ
メゾソプラノ：小林 由佳
テノール：城 宏憲
バリトン：近野 賢一
合唱：東京混声合唱団、「第九」県民合唱団
サラムンカ少年少女合唱団
管弦楽：愛知室内オーケストラ
合唱指導：荻野 砂和子、松下 雅人

チケット
全席指定 S 5,000 円 A 4,000 円
[サラムンカメイト S 4,500 円 A 3,600 円]
※学生半額（30歳まで）

プログラム
〈第1部〉東京混声合唱団のステージ
信長貴富：不滅のアンセム～第二の国歌と呼ばれる歌たち～
〈第2部〉
ベートーヴェン：交響曲第9番ニ短調作品125「合唱付き」



©Yoshinori Tsuru

新・首席指揮者とバッハ演奏のスペシャリストが奏でる

鈴木優人&バッハ・コレギウム・ジャパン

～バッハ・チェンバロ協奏曲演奏会～

2019. 7/21(日) 16:00 開演 [15:30 開場]

指揮・チェンバロ・オルガン／鈴木優人
ヴァイオリン／若松夏美
リコーダー／アンドレアス・ベーレン
器楽／バッハ・コレギウム・ジャパン

プログラム
J.S. バッハ：チェンバロ協奏曲
第3番 二長調 BWV1054 第4番 イ長調 BWV1055
第6番 へ長調 BWV1057 第7番 ト短調 BWV1058 ほか
※曲目は変更になる場合がございます。

チケット
全席指定 S 4,000 円 A 2,000 円
[サラムンカメイト S 3,600 円 A 1,800 円]
※学生半額（30歳まで）

チケット
発売中



©Marco Borggreve

